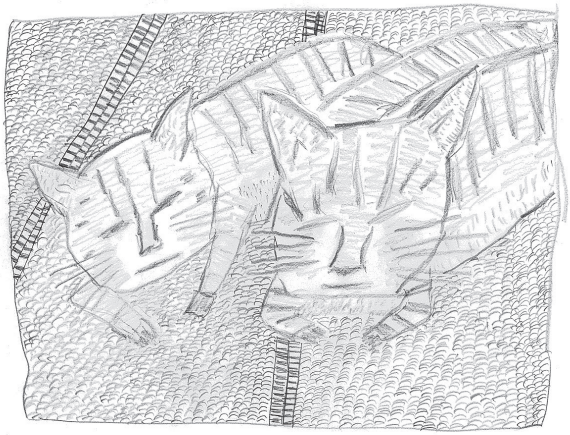
西南学院大学　国際文化論集　第32巻　第１号　113－157頁　2017年８月

キリスト教教育と私（15）

塩　野　和　夫

(1)

1989（平成元）年３月20日（月）夕方，豊中市にあった塩野まりの実家に着く。宇和島を先に出発していた大西正一さんは荷物を降ろし，一息つくと急いで帰って行った。夜，人間二人と猫二匹は塩野和夫の実家に移動する。枚方市にある塩野の家はいずれも２階建ての二棟に新築されていた。道路に面した母屋の１階には治療室と台所それに居間があり，イエス復活を描いた大きな絵を治療室の壁に掛けてあった。道路から奥になる離れの１階にはそろばん教室と台所，２階に和室２部屋があった。この２室は私たちのために準備されていた。とりあえずの住居に落ち着いた時，緊張していたトラジロー（「トラ」と呼ぶ）とタマサブロー（「タマ」と呼ぶ）は声をかけてもボックスから出てこない。それで猫たちを置いたまま母屋の居間に出かけて団欒のひと時を楽しみ，部屋に戻って驚いた。留守にしていたのは１時間足らずである。その



昼寝をするトラとタマ（1990年当時）

わずかな間に襖障子すべてが破られていた。トラとタマの仕業に違いない。やむをえず障子紙の残骸を取り去り，散らかされていた紙きれも掃除した。これが枚方における最初の仕事となる。

荷物の整理も終わらないうちに訪ねたのは，同志社大学神学部の土肥昭夫教授である。かねてより宇和島における仕事を終えたなら，しばらくは研究活動に従事するつもりでいた。大津教会，宇和島信愛教会・伊予吉田教会で働いた10年間に臨時収入のすべてを貯金に回したのはそのためである。研究対象として当初，イギリスの神学者フォーサイス，P.T.（Forsyth, Peter Taylor 1848-1921）を考えていた。高倉徳太郎に大きな影響を与えたフォーサイスは堅実で地に足のついた研究業績を残している。そのために「日本の神学界が学ぶべき何かがある」と思われた。ところが，宇和島における経験はフォーサイス研究の構想を粉々に打ち砕いていた。「つぶされてしまったままでは本当の自分を生きることは出来ない」という直感が具体的に何を意味するのかは知りようもなかった。しかし，どこよりもまず神学館４階に土肥昭夫先生を訪ねたのはこの動機による。突然の訪問であったにもかかわらず，土肥先生は研究室におられた。しかも，私の来訪を待ちかねていたかのようににこやかに迎えて下さる。挨拶もそこそこに土肥先生が提案されたのは２つのアドバイスである。「啓明館３階にある人文科学研究所の事務室を訪ね，キリスト教社会問題研究会（「CS」と略記する）に研究協力者として登録すること」と，「ラトガース大学の大林浩先生が来年度トレルチを教えられるので，ぜひ聴講するようにという勧め」である。土肥研究室を失礼すると，真っ直ぐに啓明館３階へ向かう。その間に土肥先生が連絡されていたので，事務室には研究所教員の吉田亮先生が待機していた。彼は神学部の後輩でもあったので，４階にある吉田研究室で打ち解けて話し合えた。その上，年度末であったにもかかわらずCSの研究協力者として登録してもらえた。当時CSには４つの研究班が活動していた。そのうち３つの班に加わることもできた。「キリスト教と日本社会の研究」（研究会は第１金曜日），「近代天皇制とキリスト教の研究」（研究会は第２金曜日），「日本におけるアメリカン・ボード宣教師文書の研究」（研究会は第４金曜日）の３グループである。

教会は豊中教会（村山盛敦牧師）への転入会式を執行していただいた。これには少し説明を要する。日本キリスト教団では教師の籍を教区に置くからである。ところで，かつての日本組合基督教会は教師も教会に籍を置いた。そのために組合教会の伝統を

重んじる教会は現在でも教師の籍を教区と教会の双方に置いている。豊中教会はメソジスト教会の流れに立つ。しかし，村山牧師は本人に希望があれば教師の教会籍を認めた。そこで，塩野和夫牧師に対しても宇和島信愛教会から豊中教会への転入会式が行われた。ただし「当面は研究活動に従事する」ので，教会における立場は自由とされた。それに対して，塩野まりは教会学校とオルガニストの負担を求められた。豊中教会には幼稚園入園前の幼児を対象とするナースリーと呼ばれる分級があった。彼女は藤井千夏さんと二人でナースリーを担当する。改築される以前の豊中教会会堂には会衆席の後方に聖歌隊用の２階席があり，その前方にクロダトーンを置いていた。オルガニストとの交流を楽しみながら，塩野まりは時間を作ってオルガンの練習に打ち込んでいた。

４月に有澤総合病院で診察を受ける。「どこかが悪い」という自覚はなかった。しかし，「宇和島でのストレスが体に影響していないはずはない」。それで研究活動に専念する前にチェックをしておく必要を感じた。都ヶ丘町から府道144号線を10分ほど枚方市駅に向けて歩くと，道の左側に病院はあった。受付で「山村先生の診察を希望する」と申し込むと，直ぐに診察室へ案内される。彼は弟塩野清のテニス仲間で，事前に連絡が入っていた。初対面の山村先生に「こんな医者もいたのか」と驚かされる。真黒な顔に真っ白な歯が目立っていた。身体の動きも敏捷で，まるでテニスコートに立っているかのようだ。しばらくあいさつを交わすと血液と尿の検査を求められる。

１時間くらいしてから，診察室に入ると山村医師の表情が変わっていた。

山村医師　血液検査と尿検査の結果が出てきました。
塩　　野　どうでしたか。
山村医師　どこかに病気が見つかったというわけではありません。しかし，……。
塩　　野　しかし，……。どうなのでしょうか？
山村医師　いろいろな値がボーダーラインを示しています。もう少し宇和島に留まって居られたら，間違いなく病気を発症していたと思われます。
塩　　野　そういうことですか。それでは，どうすれば良いのでしょうか。
山村医師　丁寧な検査が必要です。
塩　　野　分かりました。よろしくお願いします。

山村医師の診察を受ける（1989年４月）

山村医師　検査は通院でも可能です。けれども，通院だとかえって面倒ですので，１週間程度の検査入院をお勧めします。５月の連休明けにでも入院されたらいいと思います。

＊

1989年度が始まった時点では，「ゆったりと研究活動を始める」つもりだった。健康上の問題が理由の一つである。山村医師から「丁寧な検査が必要です」と指摘を受けていたので，５月上旬に結局10日間の検査入院をした。その後も毎月検査を行い，いろいろな値が落ち着いてきたのは秋になってからである。ただしその時点でも潜血と尿たんぱくの値，つまり腎臓に関しては問題を残していた。だが，「ゆったりと始めたかった」もう一つの理由がある。研究上はこちらが本質的だった。「宇和島でつぶされた現実を克服しなければならない」という研究にかけた実存的課題は明らかだった。それに対して，「何を研究課題とするのか」は漠然としている。だから，中心的な課題を明確にするためにもゆったりと始めたかった。

ところが，研究活動そのものが「ゆったりと始めたい」希望を許さなかった。受講したのは大学院における土肥ゼミ１コマ，大林先生の講義１コマ，それとCS月３回

の研究会だけである。けれども，それぞれに研究発表を求められた。そのため，中心となる研究テーマを曖昧にしたままで個別の研究活動に没頭せざるをえなかった。それぞれの研究課題は次の通りである。

土肥ゼミ	組合教会史の先行研究
大林先生の講義	歴史研究に対するトレルチの方法論
CS の第１研究	組合教会の統計研究
CS の第２研究	『基督教世界』誌における天皇制関連記事
CS の第４研究	ラーネッドの1890年書簡

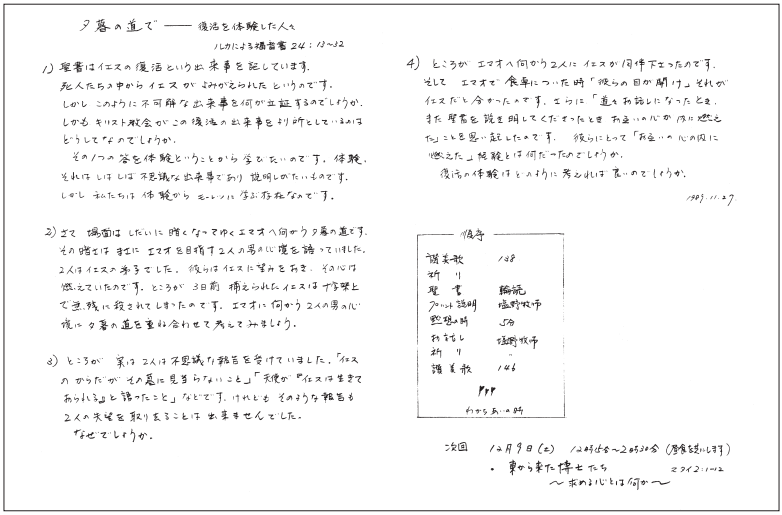
研究活動に取り組み始めていた５月下旬である。たまたまその日は研究仲間と京都御苑の東側にある洛陽教会に立ち寄り，会堂で議論を続けていた。その時に野本ゼミの後輩でもあるＩ君から指摘を受けた。

塩野さんを見ていると，大学院の後期課程に入って研究活動をされた方がいいと思います。

実存的な課題に対する意識が強かったために，それまでは大学院後期課程への入学を考えていなかった。しかし，Ｉ君の指摘は的を得ていた。後期課程に入ったならば，研究活動に必要な立場が備わるからである。

数日で大学院後期課程への受験を決めたので，夏休みに入ると入試に必要な準備を始める。過去問を取り寄せて解いてみたところ，英語には何の問題もなかった。宇和島で８年間，毎週英語の注解書に取り組んでいた結果が思わぬ成果となって表れたに違いない。問題はドイツ語である。かつて修士課程において野本先生から徹底して鍛えられていたにもかかわらずである。それでもドイツ語文献を読んでいるとよみがえってくるものがある。少なくとも文法は理解できていた。そこで，大林先生から学んでいたトレルチの主著 *Die Soziallehren der christrichen Kirchen und Gruppen* を読み続けることにする。試験会場で求められるレポートに関しては準備の必要を感じなかった。

*


夕暮の道で —— 復活を体験した人々

ルカによる福音書 24：12～32

1) 聖書はイエスの復活という出来事を記しています。
死人たちの中からイエスがよみがえられたというのです。
しかし このように不可解な出来事を何が立証するのでしょうか。
しかも キリスト教会がこの復活の出来事をより所としていまのは
どうしてなのでしょうか。
その1つの答を体験ということから学びたいのです。体験。
それは しばしば 不思議な出来事であり 説明しがたいものです。
しかし 私たちは 体験から そこにいに学ぶ存在なのです。

2) さて 場面は しだいに暗くなってゆくエマオへ向かう夕暮の道です。
その暗さは まさに エマオを目指す2人の男がいだく思を語っていました。
2人はイエスの弟子でした。彼らはイエスに望みをかけ、その心は
燃えていたのです。ところが 3日前 捕えられたイエスは十字架上
で惨殺に殺されてしまったのです。エマオに向かう2人の男の心
模に夕暮の道を重ね合わせて考えてみましょう。

3) ところが 実は 2人は不思議な報告を受けていました。「イエス
のからだが その墓に見当らないこと」「天使が『イエスは生きて
あられる』と語ったこと」などです。けれども そのような報告も
2人の失望を取りまることは 出来ませんでした。
なぜでしょうか。

4) ところが エマオへ向かう2人にイエスが同伴下さったのです。
そして エマオで食事についた時「彼らの目が開け」それが
イエスだと分かったのです。さらに「道々お話しになったとき、
また聖書を説明してくださったとき 私たちの心が燃えた
ちゃ」ことを思い証したのです。彼らにとって「私たちの心の内に
燃えた」経験とは何だったのでしょうか。
復活の体験はものすごに考えれば良いのでしょうか。

1989.11.27

次第

讃美歌 188
祈り
聖書 聖書朗読
アドバイス 説明 塩野坂師
黙想時間 5分
お交わし 塩野坂師
祈り
讃美歌 146

わかちあいの時

次回 12月9日(土) 14時半～20時半 (懇談会あります)
・東から来た博士たち マタイ2:1-12
～求める心とは何か～

夕暮れの道で ― 復活を体験した人々 ―
梅花女子大学　宗教部集会プログラム（1989年11月27日）

後期に入ると，梅花女子大学宗教部から講師の依頼を受けた。新たに企画された集会は主体的な参加を期待していて，メッセージを聞く礼拝的な性格に加えて意見を語りあう研究会的要素を備えていた。そこで参加者への便宜を図るために，毎回レジュメを準備して集会に臨む。

第１回　10月　宗教部室
「ヤコブの旅立ち ― 青春と自立の軌跡をたどる」（創世記28章10－17節）
第２回　10月30日　宗教部室
「み衣のふさ ― 生きる望みに乾いた女は」（マルコ福音書５章25－34節）
第３回　11月１日　宗教部室
「デブライムの娘ゴメル ― 愛を考える」（ホセア書１章２－３節，３章１－３節）
第４回　11月27日　宗教部室
「夕暮れの道で ― 復活を体験した人々」（ルカ福音書24章13－32節）
第５回　12月９日　宗教部室
「東から来た博士 ― 求める心とは何か」（マタイ福音書２章10－12節）

第６回　クリスマス礼拝　12月19日　澤山記念館チャペル
「命の主キリスト」（ルカ福音書２章１－20節，ヨハネ福音書１章１～５節）

１年近く出席を続けていると，CS の性格はおおよそ理解できた。研究会は啓明館３階の集会室で夕方５時半から２時間程度，２名の発表者によって行われた。前半の紹介報告に続き，後半は研究発表という場合が多かった。司会は田中真人先生で，毎回15名程度の参加者だった。ところが，研究内容によって集まる人たちや研究会の雰囲気に違いがある。第１週の「キリスト教と日本社会の研究」班は同志社の関係者が中心で，第４週の「日本におけるアメリカン・ボード宣教師文書の研究」班は神戸女学院・梅花学園・同志社などアメリカン・ボード関連の学校関係者が多かった。それに対して第２週の「近代天皇制とキリスト教の研究」班は広範な参加者から構成され，空気が引きしまっていた。興味深かったのは，土肥・竹中・深田など神学部教員が見せた表情である。神学部では教師として振る舞っていた彼らが，CS では一研究者としての顔に変わっている。最初に発表したのは1990（平成２）年１月12日で，「（史料調査）1910年代の『基督教世界』における天皇制関連記事」というテーマである[1]。

塩野まりは豊中教会におけるナースリーとオルガニストの奉仕に加えて，同志社大学で大林浩先生と樋口和彦先生の講義への聴講を始めていた。その上，実家の母から手伝いを求められる。パーキンソン病を患って10年になる父の体が以前にもまして不自由になり，昼も夜も世話を必要とした。そこで週の半ばは枚方にいて，半ばは豊中へ出かけ，それぞれの母を助けた。それでも大学における聴講と教会の奉仕を続けていたが，次第にオルガン演奏に魅かれていく。塩野まりが豊中教会で練習したのはいつも夕方で，礼拝堂には誰もいなかった。12月に入りクリスマス曲を練習していた時も，「タ，ター，タ，ター，タ，タ，タ，タ，ター，……」とオルガンの音だけが会堂に響き渡っている。クリスマスの豊かさに満たされるひと時だった。

1) 参照，塩野和夫「第２章　『基督教世界』（1910－1929）」（同志社大学人文科学研究所編『近代天皇制とキリスト教』55－69 頁）

暗闇の礼拝堂に響くオルガンの演奏
奏者　塩野まり（1989年12月）

(2)

1990（平成２）年４月，同志社大学大学院神学研究科後期課程に入学し，土肥昭夫先生の下で論文執筆に取り組むことになる。ゼミの同級生には村上みか（現在，同志社大学神学部教員），修士課程の２年生に宮平望（現在，西南学院大学国際文化学部教員），高島祐一郎がいた。土肥先生から入学に際して受けたアドバイスが２つある。

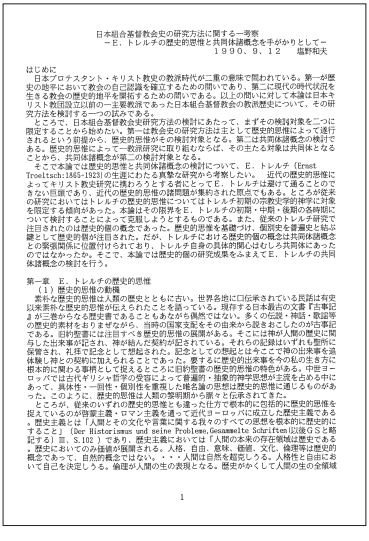
大林浩先生がもう一年同志社で教えられることになった。得難い機会なので，引き続き先生からトレルチを学ぶように……。それから，後期課程なので学会に入ったらええやろ。日本キリスト教史学会を勧める。ええか，学会というものはな，……発表するために入るんやで。

大学院に籍を置いたころから研究姿勢に変化が生じていた。研究機関や内容は変わらない。けれども，１年前とは研究に取り組む姿勢に明らかな違いがある。それは自覚的な意識から生じていた。考えてみれば，過ぎ去った１年間は無我夢中で自分を振り返る余裕などなかった。ところが，研究者としての立場を得て精神的な余裕が生じ

たせいであろう。自分の置かれている場を観察し，気づかされた事実がいくつもあった。

まず，大学院における研究活動のきつさである。大学院生の多くは20歳代の青年で，彼らはそれぞれの課題に向かってエネルギッシュに取り組んでいる。そんな中にあって1990年４月時点で私は37歳であり，その上10年間も研究の場を離れていた。机を並べているゼミ仲間と同じペースで取り組めるはずがない。大学院においてはゼミ仲間に刺激されながら，自分のペースで研究活動に取り組むしかなかった。キリスト教史学会第41回大会が９月11日から13日にかけて関西学院大学千刈セミナーハウスで開かれた。大会の２日目に「日本組合基督教会史の研究方法に関する一考察 ― E.トレルチの歴史的思惟と共同体諸概念を手がかりとして ―」と題し，18枚の原稿を準備して研究発表した[2]。大林浩先生に指導いただいたトレルチに関する研究成果である。土肥ゼミにおける成果としては日本組合基督教会史の先行研究に一応の見通しをつけていた[3]。

CS では大学院のようなきつさを感じることはなかった。しかし，研究内容の質がここでは問題となった。出席者はいずれも第１戦で活躍中の研究者だった。そのような場に参加する以上，学問的レベルを備えた発表をしなければならない。CS では研究者として鍛えられた。「キリスト教と日本社会の研究」班では1990年４月６日に「(研究)『日本組合教会便覧』の統計資料の分析と解明(1)」を発表した[4]。９月14日



日本組合基督教会史の研究方法に関する一考察
－E. トレルチの歴史的思惟と共同体諸概念を手がかりとして－
１９９０、９、１２　　塩野和夫

はじめに
日本プロテスタント・キリスト教史の教派時代が二重の意味で閉ざれている。第一が歴史の地平に教会の自己認識を確立するための問いであり、第二に現代の時代状況を生きる教会の歴史的地平を開拓するための問いである。以上の問いに対して本論は日本キリスト教団設立以前の一主要教派であった日本組合基督教会の教派歴史について、その研究方法を検討する一つの試みである。
ところで、日本組合基督教会史研究方法の検討にあたって、まずその検討対象を二つに限定することから始めたい。第一は教会史の研究方法はまずもって歴史的思惟によって遂行されるという前提から、歴史的思惟がその検討対象となる。第二は共同体諸概念の検討である。歴史的思惟によって一教派研究に取り組むならば、その主たる対象は共同体となることから、共同体諸概念が第二の検討対象となる。
そこで本論では歴史的思惟と共同体諸概念の検討について、E. トレルチ（Ernst Troeltsch:1865-1923）の生涯にわたる真摯な研究から考察したい。　近代の歴史的思惟によってキリスト教史研究に携わろうとする者にとってE. トレルチは避けて通ることのできない巨匠であり、近代の歴史的思惟の諸問題が集約された原点でもある。ところが従来の研究においてはトレルチの歴史的思惟についてはトレルチ初期の宗教史学的神学に対象を限定する傾向があった。本論はその視界をE. トレルチの初期・中期・後期の各時期について検討することによって克服しようとするものである。また、従来のトレルチ研究で注目されたのは歴史的個の概念であった。歴史的思惟を基礎づけ、個別史を重要視と結ぶ鍵として歴史的個が注目された。だが、トレルチにおける歴史的個の概念は共同体諸概念との緊張関係に位置付けられており、トレルチ自身の具体的関心はむしろ共同体にあったのではなかったか。そこで、本論では歴史的個の研究成果をふまえてE. トレルチの共同体諸概念の検討を行う。

第一章　E. トレルチの歴史的思惟
（１）歴史的思惟の動機
素朴な歴史的思惟は人類の歴史とともに古い。世界各地に口伝承されている民話は有史以来素朴な歴史的思惟が伝えられたことを語っている。現存する日本最古の文書『古事記』が三巻からなる歴史書であることもあながち偶然ではない。多くの伝説・神話・取説等の歴史的素材をおりまぜながら、当時の国家支配をその由来から説きおこしたのが古事記である。旧約聖書には注目すべき歴史的思惟の萌芽がある。そこには神が人間の歴史に関与した出来事が記され、神が結んだ契約が記されている。それらの記録はいずれも聖所に保管され、礼拝で記念として想起された。記念としての歴史とはやがてここで神の出来事を通体験し神との契約に加えられることであった。要するに歴史的出来事を今の私の生き方に根本的に関わる事柄として捉えるところに旧約聖書の歴史的思惟の特色がある。中世ヨーロッパでは古代ギリシャ哲学の受容によって普遍的・抽象的神学思想が主流をなすなかにあって、具体性・一回性・個別性を重視した補色論の思想は歴史的思惟に通じるものがあった。このように、歴史的思惟は人類の聖書的原点から脈々と伝承されてきた。
ところが、従来のいずれの歴史的思惟とも違った仕方で根本的に旧約的に歴史的思惟を捉えているのが啓蒙主義・ロマン主義を通って近代ヨーロッパに成立した歴史主義である。歴史主義とは「人間とその文化や営為に関する段々のすべての思想を根本的に歴史的にすること」（Der Historismus und seine Probleme,Gesammelte Schriften 以後ＧＳと略記する］Ⅲ、S.102）であり、歴史主義においては「人間の本来の存在領域は歴史である。歴史においてのみ価値が展開される。人格、自由、意味、個性、文化、後期等は歴史的概念であって、自然的概念ではない。・・・人間は自然を超克しうる。人格性と自由において自己を決定しうる。倫理が人間の生の表現となる。歴史がかくして人間の生の全領域

1

キリスト教史学会第43回大会発表原稿「日本組合基督教会史の研究方法に関する一考察 ― E.トレルチの歴史的思惟と共同体諸概念を手がかりとして ―」
1990.9.12　塩野和夫

2) 参照，「第２部　日本組合基督教会史研究の方法論」（塩野和夫『日本組合基督教会史研究序説』119－188 頁）
3) 塩野和夫「日本組合基督教会史の研究史」（塩野和夫，前掲書，9－118 頁）
4) 参照，塩野和夫「『日本組合教会便覧』の統計資料分析とその解明(1)」（『キリスト教社会問題研究』第 39 号，1991，16－49 頁）「第４部　日本組合基督教会統計の研究」（塩野和夫，前掲書，295－398 頁）

には「（史料調査）1920年代の『基督教世界』における天皇制関連記事」を研究発表した。

＊

思いがけない変化が春になって２つあった。一つは豊中への転居である。塩野まりは枚方と豊中を行き来していたが，必要とされているのは明らかに豊中だった。しゅうとは隣地にある平屋のプレハブ住宅（「カテージ」と呼んでいた）を購入していた。４月にこのカテージへ引っ越す。豊中ではなるべく妻の両親と４人で夕食を採った。食事中，「仕事で世界の95か国を回った」と言うしゅうとは不自由な体であるにもかかわらず多弁だった。カンボジアで訪ねたアンコールワットの印象，パキスタンなどイスラム教国の人たちとの付き合い，ナイジェリアやケニアなどアフリカの雄大な自然，中南米諸国で食べたバナナの話など，話題は尽きなかった。

もう一つは西宮キリスト教センター教会（以下，「センター教会」と略記する。現在の西宮門戸教会）への就職である[5]。「日曜日だけでいいから」という条件だったので，６月中旬から主任担任教師を引き受けた。礼拝出席は20名ほどで，教会教育主事（以下，「DCE」と記す）として高寺幸子さんがいた。会員にも神戸女学院や聖和大学の関係者が多く，それぞれに個性豊かだった。センター教会へは阪急電車を使って通う。阪急西宮北口駅で今津線に乗り換え，宝塚方面最初の門戸厄神駅で下車すると５分で教会に着いた。設立時の「キリスト教精神に基づく地域活動の拠点となる教会形成」という祈りが，「キリスト教センター教会」という名称に込められていた。着任時のあわただしさが一段落すると，出エジプト記による講解主題説教を試みた。

６月17日　「転換期を生きる」（出エジプト記１章１～22節，ルカ福音書２章25～35節）
６月24日　「モーセの青春」（出エジプト記２章１～25節，マルコ福音書10章17～22節）
７月１日　「聖なる神が聞かれた」（出エジプト記３章１～22節，ルカ福音書５章１～11節）
７月８日　「神の杖をとり」（出エジプト記４章１～31節，使徒行伝９章１～９節）

5) 本稿における西宮キリスト教センター教会の叙述にあたってはに西宮門戸教会より1990 年度から 1992 年度までの週報を借用した。

着任以来，新鮮な出会いに心を開かれていったが，６月24日（日）の礼拝で就任式を執行する。就任の辞では教会の在り方に共感性をにじませながら，「西宮キリスト教センター教会という看板を掲げた教会に神の導きを感じる」と始めた。生徒一人ひとりの可能性を重んじるDCE高寺幸子さんの柔軟な対応には新たな発見があった。教会音楽やキリスト教教育，社会福祉事業に打ち込む教会員との出会いも新鮮だった。そのような中に聖和大学の学生がいた。その一人でキリスト教教育学科の千坂邦彦君（石川県内灘町出身）は教会教育実習生として出席しながらも，将来の仕事に不安を感じていた。それに対して幼児教育学科の島津知代さん（香川県善通寺市出身）はいつも明るく，おおらかさと繊細さを持っていた。秋になると，礼拝後に学生さんたちと教会近くのラーメン屋へ行く。教会学校夏期キャンプは成松伝道所と合同で，８月１日から２日に猪名川キャンプ場で行った。25名の参加者がある。なお，７月１日（日）の役員会で塩野和夫の教会籍を豊中教会からセンター教会へ移すことが認められた。

10月になって聖和大学関係者から「11月から1990年度後期の児童教育学科１年生の宗教学を担当してもらえないか」と丁重な依頼を受けた。依頼されたのが10月で，講義は11月からだから，準備する時間はほとんどない。ところがなぜかその時，「分かりました。引き受けましょう」と即答する。頭の中に９回分の講義概要があったので，自信をもって引き受けることができた。次の通りである。

序　論	宗教とは何か	３回
本論１	旧約聖書の人々	３回
本論２	イエスと出会った人々	３回

聖和大学へは車で通勤した。豊中から国道171号線を走り，阪急電鉄今津線を越えてすぐ津門川沿いの道で右折する。この道を５分ほど行くと聖和大学の駐車場があった。事務室に立ち寄り出席簿を受け取っていると，事務員から呼び止められた。

この度は急な話で申し訳ありません。100名を越えるクラスで，講義中は少々うるさいかもしれません。よろしくお願いします。

①西宮キリスト教センター教会　②門戸厄神駅　③阪急電鉄今津線
④西宮市立中央病院　⑤国道171号線　⑥津門川
⑦神戸女学院　⑧聖和大学

西宮キリスト教センター教会周辺図（1990年当時）

２階の大きな教室に入ると，新しい教師のためか静まっている。授業中も私語をすることなく，学生は耳を傾けてくれている。快い疲れを覚えながら講義を終わると，駆け寄ってくる学生がいた。センター教会の島津さんである。彼女はにこやかに「先生，よろしくお願いします」とあいさつだけすると，すぐに走り去っていった。

＊

神学館２階の図書室で調べ物をしていた1991年３月中旬である。昼過ぎに事務職員から声をかけられた。

塩野さん，電話ですよ。こちらまでおいでください。

思いがけない呼び出しに「誰だろう」と思いながら，受話器を取ると母親だった。

お父ちゃんが悪い。入院することになった。急いで帰ってきてほしい。

涙声で一方的に話し続けると，ガチャンと切れた。電話の話だけでは父に何が起こっているのかよく分からない。ただ気になる事実があった。この数か月父は痩せてきていた。治療をしている間も，「エイッ！」「エイッ！」と声だけは元気そうである。しかし，体力が伴っていないように思える時があった。それでも，「父が悪い」とは信じられなかった。いずれにしても急いで帰らなければならない。調べ物を片づけ，「自宅に急用ができました」と断って大学を後にした。同志社大学から京阪三条まで歩き，三条駅から枚方市駅は京阪電車に乗り，市駅から自宅までを歩くというコースで帰る。家に着いたのは午後３時半頃である。ところが，驚いたことに治療室から「エイッ！」「エイッ！」と父の声が響いてきていた。

治療をしている隣の居間で，母親から説明を受ける。

和夫　「お父ちゃんが悪い」って，どういうことや？

母親　お父ちゃん，最近痩せてきてたやろ。

和夫　うん。それはそう思う。

母親　心配やから，今朝有澤病院で山村先生に診てもらったんや。

和夫　どうやった？

母親　そうしたら，「出血がある」そうや。それで，「体力が落ちてる」って言ははるんや。

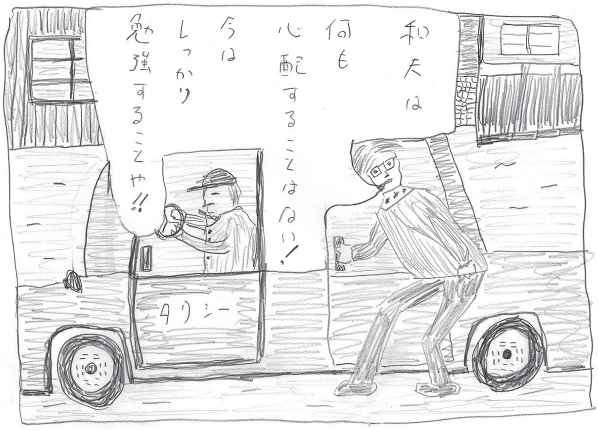
和夫　そうか，……。そう言われたら，そんな感じしてたもんな。

母親　「出血の原因は手術をしてみないと分からない」そうや。けれども，「体力がないからすぐに手術はできひん」って言ははる。

和夫　どうしたらいいのかな。

母親　入院して体力をつけ，それから手術をするそうや。

夕方に治療を終えた父は書類の整理をした。それからタクシーを呼び，母親に続いて乗り込もうとしたその瞬間である。私の方を振り返り，言葉をかみしめるようにして父は力強く言った。



入院する父（1991年３月）

和夫は何も心配することはない！
今はしっかり勉強することや!!

(3)

大学院博士課程に籍を置いて２年目となる1991（平成３）年度を迎えた。この頃になると研究活動が軌道に乗り，トレルチと組合教会の統計研究はほぼ完成していた。先行研究[6]も目途がついていた。したがって，これらの基礎的作業を踏まえた上で新たな研究への着手が課題となっていた。ところが，博士論文の核心となるべき研究内容については何のアイデアも持ち合わせていなかった。そのような時に大きな仕事が舞い込んできて，膨大な時間を費やすことになる。この年の春は塩野まりにとっても旅立ちの時となる。神戸松蔭女子大学の教会音楽コース（３年）に入り，本格的にオルガンを学び始めたからである。

センター教会の仕事も２年目に入り，安定した活動を続けていた。その頃に転入会あるいは現住会員に復帰した人たちがいる。

---

6) 参照，塩野和夫「日本組合基督教会史の研究史(1)」(『基督教研究』第 54 巻第 1 号，1992 年 12 月，85－104 頁)，塩野和夫「日本組合基督教会史の研究史(2)」(『基督教研究』第 54 巻第 2 号，1993 年 3 月，1－43 頁

塩野　まり　1990年12月23日　豊中教会より転入会する。
島津　知代　1991年２月10日　善通寺教会より転入会する。
谷田記海子　1991年８月11日　現住会員に復帰する。

そのような中で教会墓地建設の希望が出され，教会として取り組んでいく[7]。

聖和大学からは1991年度も「幼児教育学科１年生の宗教学を担当してほしい」と依頼があり，引き受ける。前期の講義予定は次の通りで，テキストとして『解放の出来事 ― 出エジプト記を学ぶ』を出版した。

オリエンテーション　１回
人間の発展段階と宗教　３回
出エジプト記第１部「エジプト出立物語」　３回
出エジプト記第２部「荒野のさまよい物語」３回
出エジプト記第３部「律法授与の物語」　３回

塩野和夫
『解放の出来事
― 出エジプト記を学ぶ ―』
新教出版社，1991年

講義に関して前年度には気づいていなかった事実がある。1990度にしても1991年度にしても，講義内容は宇和島における家庭集会で何度も語っていた。だから，体験談を織り交ぜながら話す余裕がある。学生が静かに耳を傾けてくれた秘密もそこにあったと思われる。学生は講義に対する感想や意見を聞かせてくれた。それだけでなく，個人的な悩みについても相談を受けるようになっていた。

＊

7) 参照，「『教会墓地』建設の経緯および今後」（『日本基督教団　西宮門戸教会　35年目の記録　1990.9－1995.12』1－6頁）

父は入院して２週間ほど経った４月１日に手術をする。手術室に父を見送ると，家族は控室で待機していた。誰も何も言わない重苦しい時間だけが経過していく。２時間は経っていただろうか，病院関係者から促されて言われた。

手術について説明しますので，どなたか，手術室へおいで下さい。

関係者が母を意識していたのは明らかだった。しかし，彼女は拒否して私に言った。

お父ちゃんの手術しているところを見るなんて，怖いわ。和夫，あんたが代わりに行って，後で説明してえや。

それで私が行くことになり，指示された通り頭巾をかぶり，マスクをつけ，手袋をはめて，手術室に入っていった。部屋の真ん中にすえられた手術台に腹部を大きく開腹した父が眠っていた。執刀医から手際よく説明を受ける。

執刀医　お父さんは胃がんでした。
和　夫　そうでしたか。
執刀医　しかもかなり進んでいて，大動脈への転移も認められます。
和　夫　そうなんですね。
執刀医　このままだと後１か月の命です。しかし，抗がん剤をしっかりと腹部に入れていますので，ある程度は効いてくれると思います。その間，食事が胃を通りやすいように整えておきます。
和　夫　よろしくお願いします。
執刀医　ご家族には今お話ししたように説明します。しかし，ご本人には「胃潰瘍だった」と話しておきます。それでよろしいでしょうか。

手術を終え２週間ほどで退院すると，父は仕事を再開した。治療室は退院を待ちかねていた人たちでにぎわっていた。朝から夕方まで響き渡る「エィ！」「エィ！」と気合を込めた声を聴きながら，「父のために何ができるんだろうか」と私は考え続けていた。

＊

土肥昭夫先生の研究室には学外からの訪問客が度々あった。日本図書センターとの共同作業についても，1990年春には打ち合わせを始めていたと思う。概要のまとまった1991年春に関係者を集めて会議が開かれた。作業内容を説明したのは土肥先生である。

同志社人文科学研究所と日本図書センターの共同作業として取り組む今回の企画には，大別して２つの仕事がある。一つは全国に散在しているキリスト教系新聞を集めて，そのマイクロフィルムを作る仕事である。こちらの方は主として日本図書センターで担当していただく。集められた資料のうち，長老派・組合派・メソジスト派の新聞については詳細な目次を作成して読者の便宜を図る。こちらを CS 関係者で担当したい。

日本図書センター社長は経営的側面からの興味深い説明をされた。

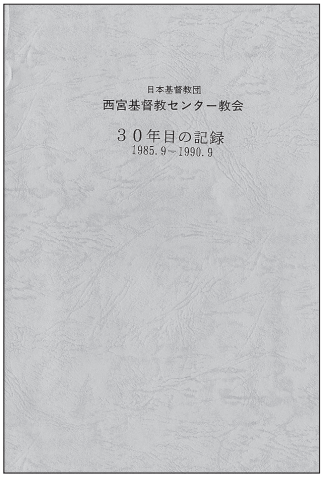
今回の事業では，まずキリスト教新聞のマイクロフィルムを作成します。目次を記した『キリスト教新聞記事集成』が出来上がるのは，それから数年後だと思われます。はっきり言って，マイクロフィルムだけでも『キリスト教新聞記事集成』だけでも，赤字が予想されます。しかし，両者による相乗効果で事業として成り立つと見ています。

説明の後，仕事内容やスケジュールについて詳細な打ち合わせを行う。それから担当者を決めた。塩野和夫は組合系新聞の責任者とされ，土肥淳子さんが協力下さることになった。

センター教会における出エジプト記の主題講解説教は５月12日に終え，レビ記に入る。

５月26日　「立ち止まって」（レビ記１章１～17節，ヨハネ福音書14章１～７節）
６月２日　「神への贈り物」（レビ記２章１～16節，ルカ福音書21章１～４節）
６月16日　「主を喜ぶ」（レビ記３章１～17節，ネヘミヤ記８章９～12節）
６月23日　「彼は赦される」（レビ記４章27～35節，マルコ福音書２章１～12節）

教会学校の夏期キャンプは東灘教会・成松伝道所と合同で７月31日－８月１日に塩瀬にある尼崎教会山の家で行う。キャンプではセンター教会の生徒が他教会の子どもたちと打ち解けて交流している。そこで，「来年の夏期キャンプも合同して行おう」と話し合って解散した。千坂君はセンター教会の特別実習生として８月25日（日）から９月15日（日）まで訓練を受けた。島津さんは９月上旬にハンセン氏病患者の施設で実施されたワークキャンプに参加している。９月には創立30周年記念事業の一環として『日本基督教団　西宮センター教会　30年目の記録　1985.9－1990.9』を出版した。詳細な年表によって教会の歩みが語られている。会員の見市公子さんが12月３日に亡くなり，５日に前夜式，６日に告別式を甲東教会で執行した。見市さんの生涯を振り返り前夜式では「開拓者」，告別式では「人の子よ，帰れ」と題して式辞を述べた[8]。



**『日本基督教団
西宮キリスト教センター教会
30年目の記録　1985.9－1990.9』**

＊

「あと１カ月の命です」と言われた父は，何事もなかったかのように仕事に打ち込んでいた。しかし，平穏な日々がいつまで続くのか，だれにも分からなかった。３カ月か，半年か，それとも１年か？「いや，１年はとても抗がん剤の効果が続かない」と思われた。そうだとしたら，およそ半年の間に「父のために何かを仕上げておきたい」。しかし，私にできる「何か」とはどのようなことなのか。結論として，「父が生涯を捧げた私の半生とはどのようなものであったのか。それを明らかにすることがせめてもの報いに違いない」という考えに至る。しかし，「私の半生」を改めて書き起こす時間はない。そこで思い立ったのが書き溜めてきたものによって，「私の生き方」を明らかにすることだった。次の通りである[9]。

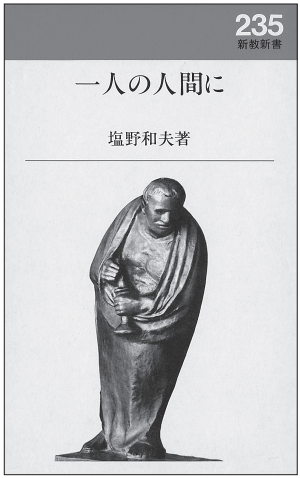
8) 「開拓者」（塩野和夫『好きが一番』105-109 頁），「人の子よ，帰れ」（塩野和夫，前掲書，110－117 頁）

収録されている作品の解説を簡単にしておきたい。

「第１部　一人の人間に」に収められている13篇の作品は「この確かな生を」を除いて小冊子「一人の人間に」（1974年10月10日発行）に収録されている。その標題には当時の私の福音理解が端的に表現されている。すなわち，キリストの福音とは他者を見下ろす高みに私たちを立たせる力なのではなく，真実に１人の人間であることを生かしめる力だという理解である。

「第２部　続　一人の人間に」に収められている15篇の作品は，「たこ焼き屋のおばちゃん」，「幸せな人」，「人の心の宝物」，「清掃の心」，「職は人なり」，「父のこと」を除いて，小冊子「続　一人の人間に」（1985年10月１日発行）に収録されている。その題材は「父のこと」，「母のこと」を初め，幼少より強い影響を受けた柴田勝正氏を扱った「幸せな人」，初めて聖書を共に学んだ「たこ焼き屋のおばちゃん」から著者が30歳代半ばまで在任した宇和島で出会った人たちにまで及んでいる。

「第３部　わたしたちのオアシス」は小冊子「わたしたちのオアシス」（1986年11月23日発行）に収められている15篇の小説教をほぼそのまま記載している。礼拝説教や家庭集会でも丁寧な原稿を準備するのが私の常であった。ところが，この小冊子に収録されている小説教はほとんど準備することもなく語ったものを参加者の方々がテープ起こししてくださったものである。そもそもこの集会は取り返しのつかない悲しみの前に座り，言葉にならない言葉で共に祈ることから始められた。そのためでもあろうか，内容に一貫性が欠けたり繰り返しがある中にも，語らせられることによって励まされてきた小説教であった。



塩野和夫『一人の人間に』
新教出版社，1991年12月出版

この本に『一人の人間に』とタイトルを付け，12月に出版した。幸いなことに，その時点で元気だった父に誰よりもまずプレゼントする。

9) 参照，「あとがき」（塩野和夫『一人の人間に』153－156頁）

(4)

センター教会のクリスマスシーズンはあわただしく充実した日々として過ぎて行った。教会学校クリスマス礼拝（12月22日〔日〕朝９時）は島津知代さんが説教を担当した。終ってからクリスマスツリーの飾り付けをし，子どもたちへのプレゼントを配る。礼拝（朝10時15分）では「ただ神によって生まれた」（創世記３章８～13節，ヨハネ福音書１章１～13節）と題して説教した。礼拝後は準備の行き届いた愛餐会を楽しむ。23日には教会学校クリスマス祝会「第１部　礼拝（説教，千坂邦彦君）　第２部　昼食会（みんなで焼きそばを作っていただく）　第３部　祝会（渡辺宗男さんのサンタクロース登場に盛り上がる）」を楽しんだ。24日のクリスマス夕べの集いでは，「与える幸い」（レビ記22章26～33節，使徒行伝20章17～37節）という説教をする。元旦祝福祈祷（1992年１月１日朝10時から12時）では，来会者に個別のメッセージ「希望」（ヨハネ第１の手紙13章13節）を語り祝福祈祷をした。

それにもかかわらず，クリスマスの時期は漠然とした不安を抱えていた。不安の一つは研究活動に対する展望に関してである。春以来，研究時間のほとんどを使って『キリスト教新聞記事総覧』で担当する『基督教世界』の詳細な目次作成にかかっていた。クリスマス当時には1903年の1010号から始めて1910年までの目次を完成していた。次の通りである。

1903年　1910号～1061号
1904年　1062号～1113号
1905年　1114号～1165号
1906年　1166号～1217号
1907年　1218号～1269号
1908年　1270号～1331号
1909年　1332号～1372号
1910年　1373号～1424号

目次作成に膨大な時間を費やした理由は２つある。『基督教世界』誌を丹念に読みながら打ち込む作業自体に時間を要したことが，第１である。第２に，たとえば「タイトルのない記事の目次」や「広告に対する目次」に関して新たな合意ができると，

読み直しを求められたためである。遅々として進まない目次作成作業と取り組みながら，1991年も研究発表だけは続けていた。土肥ゼミの研究成果としてはキリスト教史学会第42回大会（1991年９月20日～21日，フェリス女学院大学）で，「日本組合基督教会の教会法研究」と題して研究発表をした。『基督教研究』誌にも教会法関連の論文を２本発表した[10]。CS では第１研究班で４月５日に「（研究）『日本組合基督教会便覧』の統計資料分析とその解明(2)」を発表した[11]。第４研究班では10月25日に「（研究）ラーネッド書簡 ― 1890年 ― 」を研究発表した。ただし一連の発表は1989年４月から1991年３月までの研究成果に依拠するもので，新たな展望を与える性格は持ち合わせていなかった。

*

もう一つの不安が1992年１月末に現実のこととなる。父塩野元治郎が有澤病院の個室に生涯の最期を迎えるであろう入院をした。今回の入院についても本人にはあくまでも「胃潰瘍悪化のため」と説明されていた。お見舞いに来られた方々の花で病室は埋められていく。壁に目をやると，ベッドで休む父の視線の方向にイエス昇天の場面を描いた絵（父の治療室の壁に掛けられていたもの）があり，ベッドの柵には父の手が届くところにロザリオが巻き付けられている。絵の中で天上へと上って行くイエスの視線は父に向けられているようであり，「一人になると父はロザリオを手にして祈っているのだろう」と思わされた。いずれにしても病室は宗教的な雰囲気に満たされていた。看病には母親が時間の許す限り詰めていた。私と弟は交互に病室を訪ねて，母を助ける。妹の山中裕子は出産を控えた身重の体であり，看病はできなかった。２月に入り，母が用事で病室を離れたわずかな時間に父が話しかけてきた。

元治郎　なあ，和夫。お父ちゃん，本当に胃潰瘍やろか？

和　夫　お医者さんが言うたはるさかい，間違いないやろ。春になったら元気になって退院できる。そうしたら，たくさんの患者さんが待ったはるで！

10) 塩野和夫「日本組合基督教会の教会法研究(1)」(『基督教研究』第 53 巻，第 1 号，1991 年 12 月，43～84 頁)，塩野和夫「日本組合基督教会の教会法研究(2)」(『基督教研究』第 53 巻，第 2 号，1992 年 3 月，29～59 頁)

11) 参照，塩野和夫「『日本組合基督教会便覧』の統計資料分析とその解明(2)」(『キリスト教社会問題研究』第 40 号，1992，37～99 頁)

元治郎　お父ちゃんな，この頃しきりと仲間のことを思い出すんや。軍人恩給で集まっている友達や治療の研究会で講師をしている先生方や。

和　夫　ふ～ん。みんな，お父ちゃんのこと，あてにしたはるさかいな。

元治郎　その仲間もほとんどが向こうの世界へ行ってしもた。ぼつぼつお父ちゃんの番に違いない。

和　夫　……。

元治郎　それでな，和夫に頼みがある。お父ちゃんな，キリスト教の洗礼を受けたいんや。受けさせてもらえへんかな？

和　夫　分かった。センター教会の役員会に諮って，ここで洗礼を受けれるようにしてもらう。任せといて，お父ちゃん！

＊

センター教会では千坂邦彦君が1992年１月26日で実習を終了し，４月から北陸学院中高科に就職して聖書科を担当した。千坂君に代わって２月から会堂清掃を担当したのは島津知代さんである。塩野元治郎の洗礼志願は３月１日の役員会で諮られ，病床洗礼が承認された。なお，センター教会におけるレビ記による説教は２月16日で終了し，２月23日から民数記による講解主題説教を始めた。

２月23日　「民を数える」（民数記１章１～19節，マタイによる福音書10章１～４節）
３月１日　「神の共同体」（民数記２章１～19節，使徒行伝１章15～26節）
３月15日　「大祭司イエス」（民数記３章１～10節，ヘブル書４章14～16節）
３月22日　「人を生かす」（民数記４章１～15節，使徒行伝11章19～26節）

３月３日（火）に父塩野元治郎の病状が急変する。夕方に病室を訪ねると，無意識でベッドに横たわり呼吸の苦しそうな父と，傍らに疲れ切った母塩野恵美子が座っていた。仕事を終えた弟が来たので，母を促して言う。

和夫　お母ちゃん，今日は大変やったから疲れたやろ。清が来てくれたから，看病を代わってもらって帰ろ。

母　　お父ちゃん，大丈夫かな？

和夫　お父ちゃんのことは心配ない。清がしっかり看病してくれているさかい，大丈夫や！

母　　そうやな。清，お父ちゃんのこと，頼んだで！

有澤病院から自宅まで徒歩で10分ほどかかる。病院のある中宮東之町のはずれにかつて養鶏場があった。お使いに行くと，新聞紙に10個ずつ卵を包んでくれる。ていねいな仕草を見ているのが好きだった。ところが，周辺に住宅が建ち始めると少しずつ縮小し，建物を残して鶏はいなくなった。ちょうど養鶏所跡を通り都ヶ丘町に入ろうとしていた時に，母親が話しかけてきた[12)]。

母　　なあ，和夫。今日，変なことがあったんや。

和夫　今日はお父ちゃんの具合が悪くなって，大変やったからな。

母　　それでな，「お父ちゃん，もう何も分からへんのやろか？」なんて，考えてしもた。

和夫　お母ちゃんも疲れが溜まってるさかいな。

母　　そんなこと考えてら，さみしくて，さみしくて……。それでな，なんでか分からへんけど，お父ちゃんの耳元で聞いてたんや。

お父ちゃんは，お母ちゃんが好きか？
お父ちゃんは，お母ちゃんが好きか？

疲れてたんやと思う。

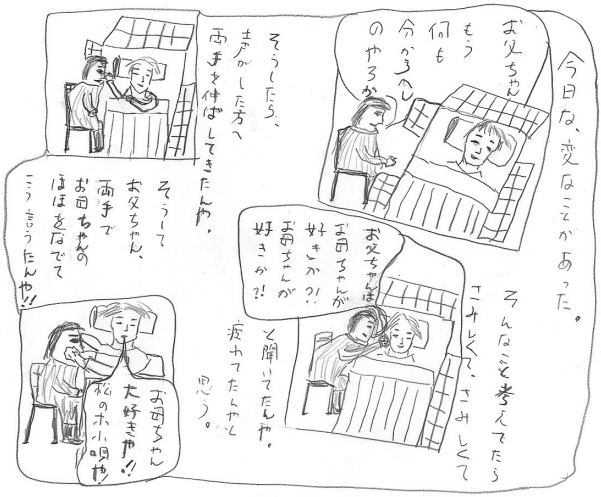
和夫　へえー，そんなことがあったんか。

母　　そうしたらな，お父ちゃん。やせ細った手を，それも両手を，声がした方に伸ばしてきて，そうしてお父ちゃん，両手でしばらくお母ちゃんのほほをなでて，こう言ったんや！

和夫　なんて言うたんや？

---

12) 参照，「はじめに」（塩野和夫『好きが一番』3－4 頁），「好きが一番」（塩野和夫，前掲書，11－16 頁），「好きが一番・その理由」（塩野和夫，前掲書，69－72 頁）



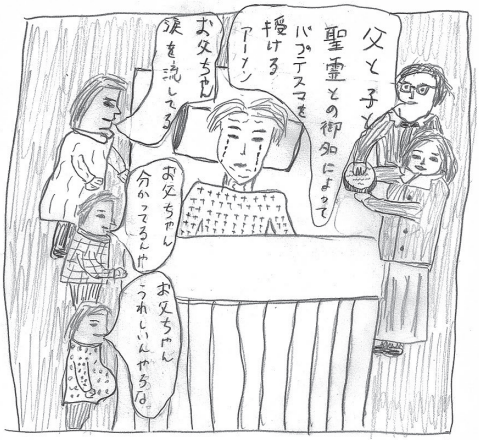
病院からの帰り道に，母から聞いた話（1992年３月）

母　　お母ちゃん，大好きや!!
　　松の木小唄や！

＊

塩野元治郎の洗礼式は病院の了解を得て，家族全員が揃う３月４日(水）の夜に行う。この日も一日中昏睡状態が続き，父は苦しそうだった。目は閉じたままで，聞いているのか聞こえていないのか，誰にも分からなかった。もしものことが起こってはいけないので，洗礼式は「序詞・聖書・勧告・誓約」を省き，まず全員で讃美歌199番を斉唱した。それから少し大きな声で父に向って「塩野元治郎」と呼びかけ，「父と子と聖霊とのみ名によってバプテスマを授ける。アーメン！」と唱え，父の額に３度水を注いだ。厳粛な一瞬に深く垂れていた顔を持ち上げると，母親を初め家族みんなが驚きの声をあげた。

母　お父ちゃん，涙を流してる！
弟　お父ちゃん，分かってるんや！
妹　お父ちゃん，うれしいんやろな！



病床洗礼を受ける塩野元治郎（1992年３月）

３月５日(木）夜９時から念入りに父の顔と手を拭いた。拭きながらゆっくりと耳元で語りかける。

お父ちゃん。天国にはな，痛みも苦しみも悲しみもないんやで。
お父ちゃんには，天国が待ってる。
だから，何も心配することはない！

語りかけたその時だけ，不思議と父は目を開けていた。その目は安らかそのもののように見えた。そして，ベッドから離れようとする私に向かって，父は何度も言った。

ありがとう！
ありがとう！
ありがとう！

これが父から聞いた最後の言葉となる。

３月６日(金）午前６時39分，塩野元治郎は家族に見守られながら地上の生涯を終えた。自宅において仏式で営まれた告別式（３月７日午後）には，ご近所・治療の関

係者・かつての仕事仲間など多くの人が集まって下さった。母から指名されて行った棺が自宅を出発する際の挨拶の結びは，父の手帳に記されていた言葉で締めくくる。

最後になりましたが，父は昨年の年頭の言葉として「感謝」という言葉を手帳に記していました。「多くの人が自分の所に来て下さることを感謝しなければならない。感謝の心を持って一人ひとりの人に接していかなければならない」と記しておりました。「感謝」という父の気持ちは今日，この告別式の場にお集まり下さいました皆様お一人おひとりへの父の真心であると思います。皆様のおかげで父はあのように豊かな生涯を送れたのだと感謝いたします。ありがとうございました。ありがとうございました。

(5)

大学院博士課程の３年目となる1992（平成４）年度に入って，研究状況は著しく改善する。「博士論文の核心となる研究内容」に対する構想のひらめきが精神的には何よりも大きかった。教会法や教会統計の研究によって歴史的な枠組みを捕えることはできる。しかし，枠組みを検討する過程で歴史的事例を捨象するために，歴史をして歴史たらしめる具体性が失われていく。そこで，大林浩先生が繰り返し話しておられた歴史的個体性を歴史的枠組みの中に位置づけ生かさなければならない。この作業によって本来の歴史は再生される[13)]。

『基督教世界』の目次作成作業も，春以降順調に進む。作業内容の確定に伴う着実な進捗に加えて，大阪大学の大学院生だった一色哲君（現在，帝京科学大学教員）の協力が大きい。いわば二人三脚で，「塩野が作成した目次を一色がチェックし，一色が作成した目次を塩野が確認する」方式で取り組んだ。すると夏までに15年間分を終えていた。

1911年　1425～1476号
1912年　1477～1527号
1913年　1528～1579号
1914年　1580～1630号

13) 参照，「はじめに」（塩野和夫『日本組合基督教会研究序説』ⅰ～ⅳ頁），塩野和夫「日本組合基督教会の歴史的四類型」（『キリスト教史学』第 50 集，39～55 頁）

1915年　1631～1681号
1916年　1682～1734号
1917年　1735～1785号
1918年　1786～1836号
1919年　1837～1886号
1920年　1887～1938号
1921年　1939～1988号
1922年　1989～2039号
1923年　2040～2090号
1924年　2091～2141号
1925年　2142～2192号

センター教会にも思いがけない動きがあった。関東にいた島津允宏君（島津知代さんの兄）が関西へ来ることになり，「４月からセンター教会の２階に住まわせてほしい」と申し出た。４月12日の役員会で島津君の希望について協議し，「会堂２階に居住し，会堂管理を条件として賃料は無料とする」ことを承認した。島津君はその週のうちに越してきたので，夜も明かりの灯る教会となった。

６月に入って土肥先生から指示され研究室へ行くと，思いがけないアドバイスを受けた。

土肥昭夫先生のアドバイス（土肥研究室，1992年６月）

今年は東北地方にある大学と福岡にある西南学院大学から公募が出ている。東北の大学やったら，塩野は間違いなく行けるやろ。西南学院大学やったら，まずあかんやろ。しかし，塩野は西南学院大学に応募したらいい。

西南学院という学校の名前だけは知っていた。福岡も何回か通過していたが，下車したことはない。それに何とも奇妙な「西南学院やったら，まずあかんやろ。しかし，……」という土肥先生の勧めである。理解できなかったが，勧めは勧めなので履歴書とこれまでの研究成果の一切を段ボール箱に詰めて，西南学院大学に送った。

*

聖和大学から「1992年度も幼児教育学科の宗教学を担当してほしい」と要請があったので，引き受ける。この年度の前期は『祝福したもう神 ― 創世記に学ぶ ―』，後期は『解放の出来事 ― 出エジプト記を学ぶ ―』をテキストにした。前期の講義は次の通りである。

オリエンテーション	１回
聖書概説	２回
創世記第１部「原始の物語」	３回
創世記第２部「アブラハム物語」	２回
創世記第３部「ヤコブ・エサウ物語」	３回
創世記第４部「ヨセフ物語」	２回

クラスでは学生の声を聴き，彼らの要望に応えるように努めた。学生の声はとても参考になる。次のような意見があった。

1　経験談を話してほしい。
- 具体的に語りかけるために，経験談を交えるように努める。

2　他宗教の立場を配慮し，カトリックや聖公会のことも話してほしい。

• 大学の講義はキリスト教の押し付けではないので，神道や仏教を否定したり悪口を言うことはない。カトリックや聖公会は歴史的経緯から分かれたが，基本的には同じキリスト教である。

3　授業への希望：「黒板の字を大きくしてほしい」「省略しないで書いてほしい」「分かりやすく話してほしい」

• このような希望にはできる範囲で応えていく。

4　採点のこと：「誤字・脱字は減点の対象となるのか」

• 脱字・誤字を減点の対象にはしない。しかし，印象が悪いので，分からない字は辞書を引いて確認する。

5　点数を甘くしてほしい。

• 平等に採点するので，特定個人に甘くすることはない。

6　ご馳走してほしい

• 車に乗れる人数（２～４人）で自宅に来てくれたら，一緒に食事しよう。

授業を終えるとほぼ毎回講壇の前までやってくる学生がいて，彼らの話を聞いた。一番多かったのは人間関係の悩み（恋愛や家族との関係）で，家の仕事と自分の将来に関する相談もあった。「学校になじめない」という悩みも受けた。

*

６月17日（水）に同志社香里中学校（当時はまだ男子校）のロングチャペル講師として招かれる。壇上から見ると20年余り前と同じ緊張感の無い雰囲気が充満していて，「母校に帰ってきた」と感じさせられた。「それでも生徒は聞いている」と分かっていたので，「点数の魔力」（出エジプト記20章４節）と題し熱く語りかけた。講話の結びは次の通りである。

最後に一人の先輩として申し上げたいのです。

みなさんは今，同志社香里中学校で学んでおられる。新島先生の教育理念をバックボーンに持つ学園で学んでおられる。これは尊いことです。ですからぜひ，この場で点数の魔力を克服して，一人の人間として生きるにふさわしい学びを治めてい

ただきたい。真実の学問は，根底に深く人間として生きることへの導きがあるものです。キリスト教教育の理念もみなさんをふさわしく育てるための導きに他ならないのです。

ロングチャペルを終えると，懐かしい校長室へと招かれた。校長は高校１年生の数学を担当された秋山諒先生だった。先生から話し出された。

秋山先生　久しぶりですね，塩野君！
塩　　野　お久しぶりです。1971年３月の卒業ですから，21年ぶりになります。
秋山先生　ロングチャペルはいかがでしたか。
塩　　野　雰囲気が私の頃と少しも変わっていませんでした。懐かしかったです。
秋山先生　塩野君は現在大学院後期課程の最終学年だと聞いています。大学院を終えられるとどうされるのですか。
塩　　野　それが……，先の話はまだ何も決まっていないのです。
秋山先生　そうですか，……。なあ～に，何も心配することはないでしょう。先のことは心配しないで，今はしっかり博士論文を仕上げてください。

＊

教会学校の夏期キャンプは東灘教会・成松伝道所と合同で，７月29日～30日に猪名川キャンプ場で行った。センター教会から18名，全体では39名の参加者があった。ところで，資料調査のため塩野まりと８月25日（火）から９月10日（木）までボストンへ出張した。留守中の執務はDCEの高寺さんが引き受け，説教は飯謙氏（８月30日）と勝村弘也氏（９月６日）が担当くださった。春以来，博士論文をまとめあげた後の研究対象を考えていて，浮かび上がってきたのがアメリカン・ボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions）である。1970年代以降，近代日本のキリスト教史研究において海外とりわけアメリカ合衆国の伝道団体で日本伝道を行ったミッションの史料が注目されていた。この点からアメリカン・ボードの宣教師文書に関心を持った。さらに19世紀における宣教活動を異文化交流としてしかも日本人の立場から研究するならば，「宗教・文化・近代史など様々な側面から新たな可能性を開拓できるのではないか」と思われた。そこで調査場所を調べたところ，ボストンに集

中していることが分かった。計画を実施するために，塩野まりが一切の準備（パスポートの取得，アンドーヴァー・ニュートン神学校における宿舎確保，切符の手配）をしてくれた。

（6）

８月25日はコリアン航空で関西国際空港からインチョン（仁川）国際空港へ向かう。空港で待ち時間があったので，タクシーを利用してソウルの街をめぐった。インチョンからニューヨークのケネディ国際空港まで12時間はかかる。ニューヨークで小型飛行機に乗り換え，ボストンのローガン国際空港に到着したのは27日（木）昼過ぎだった。空港からタクシーでニュートンのアンドーヴァー・ニュートン神学校（Andover Newton Theological School）を目指す。ところが運転手が場所を知らなかったため，ニュートンで何度も人に尋ねてようやく神学校前に到着した。

目指すフラー館（Fuller Hall）は丘の上にあったので，時差ボケの頭で坂道を登っていると下の道から声をかけてくる人がいた。アンドーヴァー・ニュートン神学校で学ぶためアメリカ西部からやってきたばかりで，ヘリック住宅（Herrick House）に住み始めた若夫婦だった。夏期休暇中のため，キャンパスは閑散としている。そんな中，何かとアドバイスしてくれたのが学生主事（Dean of Students）のサンディ（Sandy VanNess）だった。

28日（金）から調査を始める。午前中はアンドーヴァー・ニュートン神学校にあるフランクリン・トラスク図書館（Franklin Trask Library）にこもって調べた。*Year Book of Missions*（1917-1959，1960-），*The Missionary Herald*（1821-1951），*Report*（1-150）などの定期刊行物をはじめ，基本的な文献が揃っている。日本では触れたことのない貴重な史料を緊張しながら丹念に調べた。フランクリン・トラスク図書館で調査した関連図書の分類は次の通りである。

（A）Periodicals of the A. B. C. F. M.
　（1）Year Book of Missions
　（2）The Missionary Hereald
　（3）Foochow messenger
　（4）Report
　（5）A Sermon before the A. B. C. F. M. at the annual meeting

（B）History of the A. B. C. F. M.

（1）History of the A. B. C. F. M.

（2）History of the Foreign Missions

（C）Books and Pamphlets published by the A. B. C. F. M

（1）Books

（2）Pamphlets

（D）Books, pamphlets and other materials relating on the A. B. C. F. M.

（1）Books

（2）Pamphlets

（3）Other materials

＊

午後になると週に３日はコングリゲーショナル図書館（Congregational Library）へ出かけた。地下鉄グリーンライン（D）のニュートン中央駅からボストン方面へ向かい，公園通り駅で下車する。地上に上がってからはボストン・コモン（Boston Common，公園）に沿って緩やかな坂道を上り，突き当りを右折すると図書館はあった。図書司書のワースリー氏（Harrold Worthley）の対応が親切だった。帰りにはニュートン中央駅内にあったカフェ，コーヒーコネクションでコーヒーとクッキーを求めるのが楽しみだった。併せても２ドルでおつりが来た。コングリゲーショナル図書館で調べた関連資料の分類は次の通りである。

（1） Prudential Committee. Minutes (handwritten).

（2） Prudential Committee. Minutes.

（3） Boston Board Dockets 1965.

（4） Material referred to in Prudential Committee Minutes.

（5） Prudential Committee. Index to Records 1810−1865.

（6） Cabinet Meetings, Executive Cabinet Meeting.

（7） Annual Meeting. Minutes (handwritten).

（8） Annual Meeting. Minutes (handwritten and typescripet).

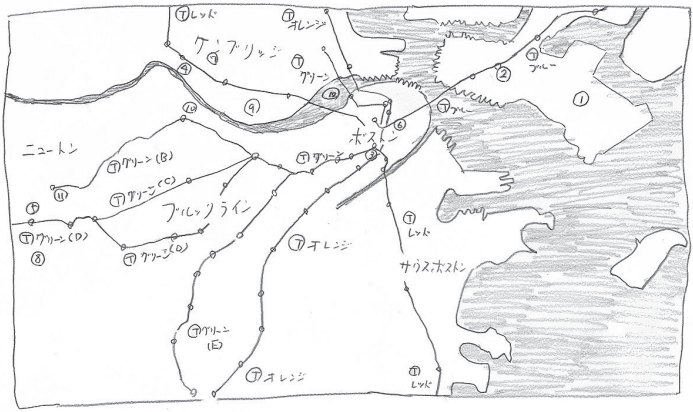
（9） Honorary Members.

（10）Committee on the Nomination of the New Members.
（11）Chandler Will Case.
（12）Various charters and acts concerning incorporation, merger, conduct ABCFM.
（13）Published work.
（14）Manuscripts.
（15）Photos.
（16）North China Mission.
（17）Central Turkey College.
（18）International College.
（19）Madoloff, Velko Nikoloff.
（20）Zmelian, Mark B.
（21）Partridge, Rev. Ernest C. Sivas, Turkey.
（22）Trustees for Donations for Education in the Near East.
（23）Sound recordings.

*

週に３日，午後から出かけたもう１か所はハーバード大学のホートン図書館（Houghton Library）である。地下鉄の公園通り駅でグリーンラインからレッドラインに乗り換え，ハーバード広場駅で下車する。地上に上がるとカフェのオーボンパン（Au bon pain）で，サンドイッチがおいしかった。ホートン図書館には宣教師文書が所蔵されていて，ラーネッドなど来日宣教師の文書をひたすらに読んだ。新島襄直筆の書簡を手にした時は，感激で手が震える。一見すると乱雑にも見える新島の手紙は骨太で，「新島襄の性格が表れている」と思われた。ホートン図書館で調査した宣教師文書の分類は次の通りである。

（1）Papers Originating in the Offices of the Board.
ABC : 1　Letters to domestic correspondents
ABC : 2　Letters to foreign correspondents
ABC : 3　Foreign department
ABC : 4　Home department



①ローガン国際空港　②ブルーライン　空港駅　③レッドライン・グリーンライン　公園通り駅
④レッドライン　ハーバード広場駅　⑤グリーンライン　ニュートン中央駅
⑥コングリゲーショナル図書館　⑦ハーバード大学
⑧アンドーヴァー・ニュートン神学校　⑨マサチューセッツ工科大学　⑩ボストン大学（BU）
⑪ボストンカレッジ（BC）　⑫チャールズ川

1990年代のボストンと周辺図

ABC : 5　Editorial department

ABC : 6　Candidate department

ABC : 7　Letters to Agencies

ABC : 8　Miscellamepus

ABC : 9　General miscellany

ABC : 10　Women’s Board

(2) Correspondents and Papers received by the American Board

ABC : 11　Letters received from domestic correspondents.

ABC : 12　Letters from officers of the Board

ABC : 13　Letters from agencies

ABC : 14　Letters from government officials

ABC : 15　Miscellaneous foreign letters

ABC : 16　Letters from missionaries to Africa

ABC : 17　Missions to Asia

ABC : 18　Missions to Europe

ABC : 19　Missions on the American countries

ABC : 20　Missions to Islands of the Pacific

（3）Auxiliary Missionary Societies

ABC : 21　Association of gentlemen. Boston

ABC : 22　Gentlemen's Association in the town of the Bradford.

ABC : 23　New York Missionary Society

ABC : 24　United Foreign Missionary Society

（4）Miscellaneous Documents and Personal Papers

（5）Index

日曜日にはサンディに紹介してもらったニュートンハイランド会衆派教会（Newton Highlands Congregational Church）へ出かけた。礼拝後に毎回用意されているコーヒーとクッキーをいただきながら，会員と談話するのが楽しみだった。

*

1994（平成６）年８月，ボストンにおける２度目の資料調査を実施する。この時の宿舎はアンドーヴァー・ニュートン神学校のケンダル館（Kendall Hall）だった。前回の調査で保管されている資料の概要は把握していた。そこで今回は研究活動に必要な文献を選定し，可能な限りコピーを取る。主な調査場所はフランクリン・トラスク図書館にして，アメリカン・ボード史関連の文献を中心に読み，必要に応じてコピーを取った。週に２日は午後にコングリゲーショナル図書館へ出かけ，ワースリー氏から様々なアドバイスを受け，興味深い史料も見せていただいた。土肥昭夫先生から依頼を受けていたので，週に１度はハーバード大学のホートン図書館へ出かけ，ひたすらに宣教師文書の模写をする。

夏期休暇中だったので，アンドーヴァー・ニュートン神学校のキャンパスは閑散としていたが，何人かの学生と出会えた。その一人がスノー氏（Mr. Snow）で，「80歳代の彼は神学校における最高年齢者だ」と聞く。アンジェラ（Angela）はキャンパスにいくつもの花壇を作っていた。それらは「アンジェラの花園」（Angela's Garden）と呼ばれていた。山口勇人氏と出会ったのもこの時である。彼は旧約聖書神学を担当するフォンティン（Carole R. Fontaine）教授に傾倒していた。心理学を研究していた

才藤千津子さんのアドバイス
（1994年８月，アンドーヴァー・ニュートン神学校）

才藤千津子さんとも話し合う。彼女は「カウンセラーとしてアメリカで仕事をするべきか，日本に帰るべきか」を悩んでいた。私も素直に「宇和島でつぶされ，それを克服しないと本当には生きていけない現実が研究動機である」と自己紹介し，経験した事柄を具体的に話した。彼女は静かに耳を傾けてくれていた。

日本への帰国が迫っていた日だった。フランクリン・トラスク図書館での仕事を終えて宿舎に向かっていると，ケンダル館の前で偶然才藤さんに出会った。「これからボストン市内へ買い物に行く」とにこやかに声をかけてくれた彼女は，次の瞬間，表情を引き締めて語りかけてきた。

才藤　塩野さん，世の中につぶされた人はたくさんいるの，……。

塩野　そうなんですね。

才藤　でも，そのほとんどはつぶされたまま，悲しみを負って生きている。

塩野　分かる気がします。

才藤　だから，塩野さんはそんな人たちのためにもつぶされた現実を克服して生きてほしい!!

塩野　「つぶされたまま生きている人たちのためにも……」ですね!!

（7）

1992年の秋である。春以来，組合教会史研究における「歴史的個体を歴史的枠組みの中に位置づけ生かす」ためにふさわしい対象を探し続けていた。ところが，どうしても見つからない。しかし，博士論文としての体裁は整えておかなければならない。やむをえず，歴史的個体を入れるための枠組みを「結章　日本組合基督教会の時期区分」としてまとめた。結局，時期区分の中に位置づける歴史的個体の特定は博士論文以降の宿題となる[14)]。

組合教会史研究が最終段階ではかどらなかったのとは対照的に，『基督教世界』誌の目次作成は一色氏の協力もあって順調に進む。年末までに残っていた17年間分を仕上げることができた。次の通りである。

1926年　2193～2243号
1927年　2244～2294号
1928年　2295～2345号
1929年　2346～2395号
1930年　2396～2447号
1931年　2448～2498号
1932年　2499～2550号
1933年　2551～2601号
1934年　2602～2652号
1935年　2653～2703号
1936年　2704～2754号
1937年　2755～2806号
1938年　2807～2857号
1939年　2858～2908号
1940年　2909～2959号

14) この宿題については，キリスト教史学会第 46 回大会（1995 年 10 月 14 日，北陸学院）で発表した「日本組合基督教会の歴史的 4 類型」によって回答のモデルを示している。参照，塩野和夫「日本組合基督教会の歴史的 4 類型」（『キリスト教史学』第 50 集，39～55 頁）

1941年　2960～3011号
1942年　2579～2610号[15)]

『キリスト教新聞記事総覧』（全10巻）は日本図書センターから1996年に出版された。全集の第２巻から第４巻に日本組合基督教会の新聞『東京毎週新報』『基督教新聞』『東京毎週新誌』『基督教世界』の詳細な目次は収められている。なおキリスト教史第43回大会（1992年９月18日～19日，ノードルダム清心女子大学）において「日本組合基督教会規約の1904年抜本改正」と題して研究発表した[16)]。ボストンにおける調査結果は，CS の「日本におけるアメリカン・ボード宣教師文書の研究」班で10月23日に「（研究）ボストン調査報告」というテーマで発表している[17)]。

センター教会は充実した秋を迎えていた。９月20日（日）には盛谷典史・依子夫妻が子女のりほさんを同伴して礼拝に出席された。そこで，礼拝後に盛谷依子さんに抱かれたりほさんをみんなで囲んで幼児祝福祈祷をする。祈り心に満たされる充実したひと時だった。10月25日（日）には教会総会を開催し，懸案だった「教会墓地建設承認に関する件」を上程し，承認を得る。11月１日（日）の役員会で事業を具体的に進めていくための担当者として，岡田藤太郎執事（長）・渡辺宗男執事（建設事務）・DCE 高寺幸子（会計）を選任した。

クリスマスはいくつもの行事であわただしく過ぎ去っていった。クリスマス礼拝（12月20日）では，「一人の人間に」（出エジプト記３章13～14節，マタイ福音書１章18～25節）と題して説教する。島津充宏君がこの礼拝で洗礼を受けた。礼拝後には島津君と神戸女学院に赴任されたアダムス女史（Susan Adams）を囲んで愛餐会を楽しむ。23日（水）午後１時からは教会学校クリスマス祝会で，DCE 高寺さんの指導により充実した時を持つ。16名の子どもが参加した。24日（木）夜７時からはクリスマスイブ燭火礼拝を行う。ろうそくの灯りだけが照らす会場で，「君は輝いているか」（ルカ福音書２章８～20節）と題して語りかけた。32名の参加者が集っていた。1993年１月１日の午前10時から12時には個々の来会者に対して講壇の前で祝福祈祷をした。ま

15) 1942 年の『基督教世界』誌は『日本メソジスト時報』の通算号数を継承している。
16) 参照，塩野和夫「日本組合基督教会規約の 1904 年抜本改正」（『キリスト教史学』第 47 集，1993，57～71 頁）
17) 参照，「アメリカン・ボード関連史料」（塩野和夫『日本組合教会史研究序説』「資料・参考文献」13－24 頁）

ずメッセージ「風は思いのままに」（ヨハネ福音書３章５～８節）を語り，それから名前をあげて新しい年における祝福を祈り求めた。

*

聖和大学では前期と後期にそれぞれの成績表の提出を求められた。1990年度後期から２年半の間に評価する対象は一貫していた。ただし，点数の配分には若干の変化が見られる。1992年度後期の評価は次の通りである。

①	小論文風レポート２回（後期中間・後期末）	80点（40点×２回）
②	チャペルレポート２回	10点（５点×２回）
③	出席点（欠席１回に付き２点減点）	10点

1990年度後期はチャペルレポートにコメントを付けて返却した。ただし２回の小論文風レポートを繰り返し読んで，いくつかのポイントから総合的な評価を下すのが精一杯だった。それでも，「学生たちはよく書いている」という強い印象を持った。彼らが真剣に取り組んでいるのはよく分かった。1991年度になると新たな印象が加わる。多くの学生は自己紹介や自らの経験，悩みをレポートに書いていた。それに講義後の教室や教会，自宅で直接話を聞く機会もあった。そのためレポートの向こうに学生の顔を思い浮かべることができた。さらにこの年度には１年を通じて同じ学生を教えたので，「彼らは１年間のクラスを通して知的にも人間的にも確かな成長を遂げてくれている」と信頼感を伴って知らされた。

1992年10月上旬だった。講義が終わるのを待ちかねていたかのように，講壇の前に走り寄ってくる学生がいた。彼女は「地元の学生で，伊丹市から通学している」と知っていたのには理由がある。前期から度々相談を受けていたからである。毎回，数分か長くて５分間，話に耳を傾けた。内容は「ご両親と彼女の希望の違いから生じていたジレンマ」だった。ところが10月上旬のその日，走り寄ってきた学生の表情はこれまでと違って爽やかだった。彼女は講壇の前まで来ると，一通の手紙を差し出して言った。

女子学生　先生に相談してきたことが解決できました。これは先生へのお礼と報告の手紙です。ご覧ください。

塩　　野　よかったですね。お手紙は家に帰ってから，ゆっくり拝見します。

感謝と報告の手紙（1992年10月，聖和大学）

自宅に帰って封を開けると，出てきたのは鮮やかな花模様を施してある便箋だった。手紙に書いていた感謝と報告の言葉を何回も読み返すうちに，深い感動が込み上げてきた。心を揺さぶられる中で，教育に関する直感がひらめく。

学生たちはそれぞれに成長を示し，問題を乗り越えてくれた。彼らと共に成長し，彼らの課題を担っていく。それが教えるということだったんだ!!

＊

西南学院大学からは，段ボール箱に詰めた書類と業績を送ってから１か月たっても２か月たっても連絡がなかった。ボストンへ出かけるに際しても，「もし調査期間中に連絡があり，対応できなかったら…」という一抹の不安があった。それで帰国するとまず妻の母に「西南学院大学から何か連絡はありませんでしたか」と尋ねた。しかし，「何もなかったですよ」という返事である。応募してから３カ月も経過しているのに何の連絡もない。「西南学院大学やったら，まずあかんやろ」という土肥先生の言葉が頭をかすめた。ところが，それから10日ほど経った９月下旬だった。同志社大学の神学館前で橋本滋男先生から呼び止められた。

橋本先生　塩野君。

塩　　野　はい。

橋本先生　塩野君は「西南学院大学に応募している」と聞いていますが，先方から何か言ってきましたか？

塩　　野　何もありません。土肥先生から「西南学院大学やったら，まずあかんやろ」と言われていますので，「そういうことかな」と思っています。

橋本先生　それが先日，ある学会で西南学院大学の先生から根掘り葉掘り塩野君のことを聞かれたので，正直に答えておきました。

塩　　野　ありがとうございます。そんなことがあったのですか。

橋本先生　要するに，今回の人事で塩野君はまだ候補者の一人として残っているということです。

塩　　野　分かりました。そういうことでしたら，引き続き西南学院からの連絡を待っています。ありがとうございました。

10月上旬のある日も午後８時を回り，風呂に入ったばかりの時だった。塩野まりが電話を取ったところ，国際文化部長　斎藤末弘先生からだった。彼女は先方に対して「すみません。今，お風呂に入ったばかりですので」と断り，私に向かっては「あなた，西南学院からお電話ですよ。すぐに上がってください」と急かした。しばらくすると斎藤先生から再度電話があり，10月中旬に行う面接の日時と場所を知らせて下さった。指定された日に本館３階の国際文化部長室に向かうと，５人の先生方がおられた。斎藤末弘先生（部長）・堤啓次郎先生（学科主任）・八田正光先生（キリスト教学）・森泰男先生先生（キリスト教学）・大谷裕文先生（文化人類学）である。面接の冒頭に八田先生が今回の人事と塩野の略歴を丁寧に紹介したうえで，「塩野先生の任用科目としてはキリスト教学に加えて宗教学を予定している」と説明された。森先生は『祝福したもう神 ― 創世記に学ぶ ―』と『解放の出来事 ― 出エジプト記を学ぶ ―』を取り上げ，「教会活動の中でこれらの著書をまとめられたことは評価できる。しかし，学問的には先行研究を初めとする参考文献を適切に位置づける必要がある」と注文された。大谷先生からは「宗教学はE.トレルチやM.ウエーバーなどの宗教社会学を中心に講義してほしい」と希望があった。最後に斎藤先生が人事に関する今後の予定について説明したうえで，「最終的には12月に行われる理事会で決定される。

決定され次第に連絡する」と結ばれた。１時間余りで面接を終えると，キリスト教学の先生３名（河野信子先生・八田正光先生・森泰男先生）が私たち２人を中華料理屋へ案内しご馳走して下さった。その場での話題は，塩野まりが同席していたこともあり，福岡で生活を始めるために必要なこと（銀行の手続き・住居について・西新での買い物）で，河野先生が具体的に話しておられた。

面接を終え最終的な決定を聞くまでの１か月余りは，内的に沈潜する時となる。その間に何度も取り出して読んだのが，「お礼と報告の手紙」である。半年ほどの苦悩とそれを克服した喜びを綴った手紙を感動しながら読んでいると，相談に来ていた学生たちの顔が次々と浮かんでは消えていった。そんなある時，不思議と鮮やかによみがえってきた声があった。

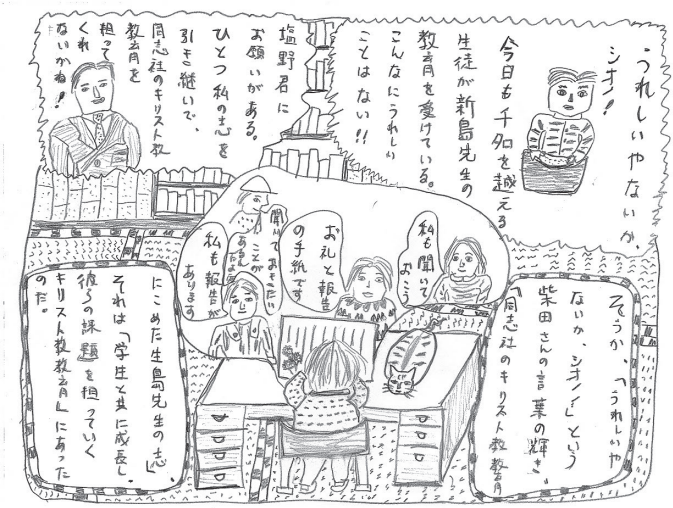
柴田勝正　うれしいやないか，シオノ！
　私もいささかお手伝いさせてもらった同志社香里で今日も千名を越える生徒が新島先生の教育を受けている。こんなにうれしいことはない。

生島校長　この３年間，私が同志社香里中学校・高等学校で打ち込んできたことを，塩野君には分かってもらえたと私は信じている。そこで，塩野君にお願いがある。
　ひとつ，私の志を引き継いで同志社のキリスト教教育を担ってもらえないかね！

柴田さんが「うれしいやないか，シオノ！」と言われたのは35年前である。生島吉造先生から「志を託された」のは22年前である。しかし，多くの年月を経ていたにもかかわらずよみがえってきた言葉は輝いていた。なぜか？　聖和大学における「学生と共に成長し，彼らの課題を共に担う」経験を通して，共感性をもって理解できたからである。

彼らの言葉の輝きは，暗闇にあって歩むべき道を示す光でもあった。宇和島でみじめにつぶされてしまっていた。だから，「これを乗り越えないと本当には生きていくことができない」ともがいた。そんなみじめな人間に，よみがえってきた輝きを放つ言葉は，つぶされてしまった経験を乗り越えて生きる道を示していた[18]。

＊



よみがえる言葉の輝き（1992年11月，豊中の自宅）

斎藤末弘国際文化部長から，「理事会で塩野先生任用の件が承認されました」と電話を受けたのは12月下旬だった。そこで1993（平成５）年に入ると，４月以降の西南学院大学赴任に向けた準備を始める。

神学部教授会に学位論文『日本組合基督教会史研究序説』を提出したのは１月中旬である。論文審査にあたって下さったのは次の先生方である。

主　　査　土肥　昭夫教授
副　　査　竹中　正夫教授
副　　査　深田未來生教授

先生方に学位論文のコピーが配布されて間もなく，まじめな顔をした深田先生から言われた。

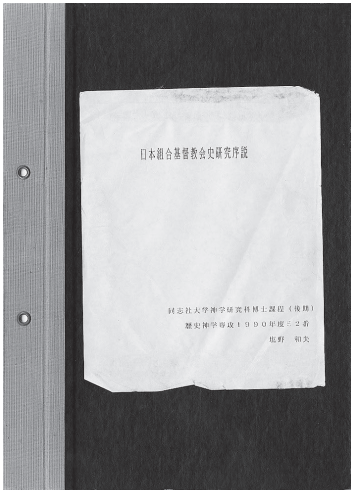
塩野の学位論文は漬物石に使ったらちょうどいい大きさだな !!

---

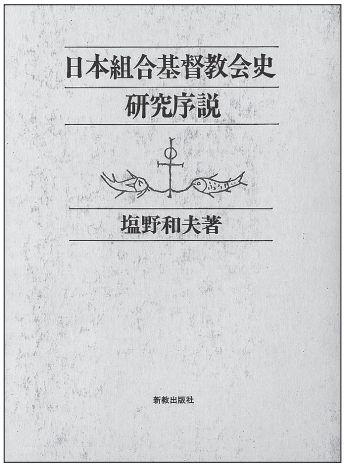
18) 塩野和夫「よみがえる言葉の輝き」（『福音と世界』1994 年 12 月号，1 頁）

審査を無事通り，論文に対する最終諮問が行われたのは1994（平成６）年２月である。神学部１階の会議室で先生方に囲まれ，厳しい議論が１時間余り続いた。土肥先生から予想もしなかった質問を浴びせかけられた。森孝一先生はアメリカキリスト教史専門の立場から問いかけられた。幸い修正を求められることなく合格し，３月の学位授与式に臨む。壇上には土肥昭夫先生がおられ，島一郎先生（当時，経済学部長）もおられた。学長から学位記を授与した際に，両先生は笑顔でもって祝福くださっていた。

福岡へ転居する前に最後にCSに出席したのは３月26日（金）で，「日本におけるアメリカン・ボード宣教師文書の研究」班の研究会だった。司会の田中真人先生は終わりに起立を求め，「この度，塩野さんは西の方へ行かれることになりました」と紹介下さった。



学位論文
『日本組合基督教会史研究序説』



塩野和夫
『日本組合基督教会史研究序説』
（新教出版社，1995年）

センター教会では１月10日（日）の礼拝後に開かれた役員会で事情を説明した上で，「３月末の辞任」を申し出て承認された。併せて後任人事の進め方について協議する。３月21日（日）に臨時教会総会を開催し，「塩野和夫牧師，辞任に関する件」と「高橋津賀子牧師，招聘に関する件」を承認した。最後となった３月28日（日）の礼拝では，「人を生かし，教会を生かす」（ガラテヤ人への手紙５章６節）と題して説教する。この日の礼拝で田中清美さんと森田寛子さんが洗礼を受けられ，小西睦子さんと小西砂千夫氏が転入会された。礼拝後の愛餐会には38名の出席者があり，温かく送り出して下さった。なお，４月から島津充宏君は四国ダンロップ社に，島津知代さんは扇町教会幼稚園に就職して旅立っていった。

新住居を決まるために福岡へ出かけたのは３月中旬である。この日は河野信子先生が迎えて下さり，まず行ったのは藤崎商店街にあったうどん屋である。この店で「どんちゃん」（うどんを麺としたちゃんぽん）をご馳走になり，とてもおいしかった。それから日高課長の案内で大学キャンパスの西側にある教職員住宅（現在の女子寮「汀寮」がある場所）を見学し，手続きをした。ところが，３月下旬になって日高課長から電話が入る。

先日，手続きをしていただいた教職員住宅の件です。調べましたところ，猫は飼えないことになっていました。申し訳ないのですが，早急に対応していただきますようにお願いします。

３月末に再度福岡を訪ね，日高課長から紹介された不動産屋に向かう。そこで勧められたマンション（早良区弥生）を契約する。マンションの一室に天井まで届く棒を買い求め，それに縄をぐるぐると巻いてトラとタマの遊び道具を作った。これが福岡における最初の仕事となる。

完